

JBL4350A 奮闘記(1)

—プロローグ—

1. 始めに

JBL4350A の最近の進展については、「スピーカーリベラメンテの試聴 (1)—メインシステムにおける試聴—」においてスピーカーリベラメンテの導入について、また「スーパーステレオへの DSD の導入(3)—JBL4350A のシステムにおけるスーパーステレオ—」においてはスーパーステレオの再チャレンジについて報告していますが、このようにしてやっと満足すべき状況が 30 年以上の苦闘をもって報いられてきたと言えるようになってきました。今回、この一連の報告ではそういった歴史を振り返ってみたいと思います。

2. JBL4350A に先立つマルチアンプシステムの試み

JBL4350A に先立つマルチアンプシステムの試みとして Mark Levinson の HQD システム (Hartley・Quad・Decca) に触発されて、JTP システム (JBL・Tannoy・Pioneer) と称してチャレンジしたことがありました。HQD システム (写真) とは Hartley の 76cm ウーファー、Quad の静電型スピーカーのダブルスタック、Decca Kelly のリボンツイーターの組み合わせで組んだシステムのことです。自称 JTP システムとはこれを真似て JBL 2230A を進行舎の 4333 の箱に入れ、Tannoy の III LZ は自作の箱入りとし、この上に発売されたばかりの Pioneer のリボンツイーター PT-R7 を組み合わせ、チャンネルデバイダーは Luxkit の真空管式チャンネルデバイダー A2003 (写真) を使用するという組み合わせでのマルチアンプシステムのことです。プリアンプは Lux の CL30、低音用のアンプは Luxkit の A3000、中低域から高域のアンプは Luxkit の 6336pp の KMQ80、PT-R7 用は Lux の SQ503 を使用しました。

結果は、まず自作の箱入り III LZ を鳴らし切っていない上に、性格の異なるユニットを組み合わせ、無謀なマルチアンプに乗りだしたわけですからさんざんなものでした。オーディオ仲間がやってきて、「デボラ・カーのお尻だけマリリン・モンローにしたようなもの」という酷評をして帰りました。しかしながら、マルチアンプが如何に難しいものであるか思い知ることでこの先のチャレンジのために勉強となりました。



2. JBL4350A の導入経過

JTP システムで苦闘している頃はオーディオバブルの崩壊した頃で、ある家電量販店の売り場縮小に際して大型スピーカーを放出するという売出しに行き当たりました。ここにアルテックの A5、クリプッシュホーン、Tannoy のオートグラフに並んで JBL4350A があったわけです。いずれも当時は手の届かないレベルのものが破格の大幅なダンピング価格で並んでいたわけですから、なんとかどれか手に入れたいと思うのは無理からぬことです。

これらの中から JBL4350A を選択したのは、部屋のスペースファクターもありますが、①当時の Lux 本社の試聴室に鎮座していたこと、②五味康祐のオーディオ巡礼の連載でテイチクの社長邸の JBL4350A の記事が出ていたこと、③マルチアンプの下敷きがあって機器がそろっていたことなどがその理由です。しかしながら、JBL4350A とて陋屋に入るかどうか問題で、原寸大の新聞紙を貼り合わせて家内と階段を上がり部屋までのルートを確認した上決断しました。やっとの思いで入れた後、義弟がやってきて、「この家は 4350 のある一番貧しい家だ」と言って帰りました。ここから JBL4350A を鳴らしこむという苦闘が始まったわけです。

以上